

「地域の福祉力を考える」

～住民支え合いの事例から～

6月12日、東部文化ホールで、ボランティア・地域活動コーディネーター力養成講座第1回「地域の福祉力を考える」を開催しました。地域福祉推進セミナーと同時開催ということもあり、150人の人で会場が埋まりました。



第1部は、ルーテル学院大学学事顧問で教授の市川一宏さんのお話し。孤立を防ぐために住民ができること、つながっていることの大切さのお話しをしていただきました。高齢になっても、認知症になっても「役割」を奪わないこと。生き方を支え、持っている力を出してもらおう。悪化する前に、ちょっと弱くなった時に手助けをする。といった言葉が印象的でした。



第2部は、シンポジウム。小地域で活動されている3人の方に、会場も交えてお話を伺いました。コーディネーター役は内山二郎さん。吉田中越の高齢者支援隊、古牧川端の避難訓練、中条の地域での助けたいボランティアなかちゃんの活動を紹介してもらいました。住民さんが積極的に参加、地域のことを考えている様子がよくわかりました。



(参加者の感想より一部抜粋)

住民関係の希薄化・高齢化・参加者の固定化。20～50才代の方々にどうやって参加してもらおうか。特にその課題解決の手段として「世代をこえて集まることの出来る居場所づくり」が必要であるということはほとんどの方がうなづくことのようにです。

市川さんのアドバイス、特に「気づきをそのままにしない。まず思い立ったらやってみる。」「生活の延長で無理なく自然体でおこなう」ということ。とても大事なことと感じました。

また、私自身10年前に障がいを負って現在車いす生活を送っているのですが、古牧地区川端区の防災訓練を紹介して下さった吉野さんの「ハンディがあるからと気おくれをしてほしくない。助けてもらうだけでなく、できることをできる人がする。そういう関係を（事業を通じて）作っていく」という方針に大変共感しました。

わたしもおっくうがらず地域の事業に参加し、より多くの地域の方々とはまずは「知り合い」になることから始めていこうとおもいます。

柳原地区一般住民 成竹精一